# 少ない交流 届かぬ情報 気付きは…

# 仮設暮らし 孤独と不安

## 宮古・田老

## 自治会機能せず

グリーンピア三陸みやこにある仮設住宅群。住民のつながりが薄れ、自治会の再編が求められている＝宮古市田老

約400世帯が入居する宮古市田老のグリーンピア三陸みやこの仮設住宅群で、自治会が機能していないことに住民から不安の声が上がっている。市は集落単位の入居を推進しているものの、「どこに誰が住んでいるのか分からない」とつながりが薄れているのが現状。避難所生活に比べ住民が顔を合わせる機会も減り、情報伝達や安全、健康管理の面からも「仮設のまち」に自治会組織の再編が求められている。

田老地区では、ほぼ全てに当たる31自治会が行政区ごとに組織され、このうち中心部などにある14自治会の地域が被災した。

同地区中心部から離れた仮設住宅で暮らす被災者のほか、高台で津波の被害を免れた住宅も点在するため、自治会機能がストップ。解散を余儀なくされたケースもある。

仮設住宅群は三つの団地からなり、先月下旬までに約400世帯が入居。集会所は閉ざされたまま団体活動もできず、「仮設のまち」での情報伝達はひと苦労だ。

仮設住宅に入居する大棒レオ子さん(63)は「全ての仮設住宅に行事や集まりのお知らせなどを配布するには、1人や2人では無理」と個人の力の限界を訴える。

固定電話がない世帯も多く、大棒さんは「自治会があれば個人ではできないこともできるようになる。高齢者ら全員の安全を守るためにも早く活動してほしい」と望む。

避難所から仮設住宅に移り、被災者同士が顔を合わせる機会が減少。全国からの人的支援も減る中、病気などの異変に周囲が気付かないことも懸念される。

グリーンピア三陸みやこの宿泊施設で地域医療に当たる黒田仁田老診療所所長(42)は「具合の悪い人がいる、最近家に電気がつかないなど、民力を使った情報を伝える仕組みづくりが必要」と健康管理面から課題を指摘する。

「顔の見える」コミュニティー維持へ市田老総合事務所は5日、行政連絡員らを集め、行政区の再編について協議する。

## 急降下の際に自動操縦作動

### HAC機トラブル

北海道エアシステム（HAC、札幌市）のプロペラ機が奥尻空港で地上30メートル付近まで急降下したトラブルで、機長が着陸を断念して機体を上昇させようとした際に、本来作動させてはならない自動操縦装置が一時「オン」になっていたことが2日、同社への取材で分かった。HACや運輸安全委員会は、上昇が遅れた原因の一つとみて、スイッチが入った経緯を調べる。

HACによると、スイッチが入ったのは、上昇を試みてから地上に異常接近するまでの数秒間。

自動操縦装置が作動した状態で逆らった操作をすると操縦かんは動かしにくく、今回のような着陸やり直しの場面では、装置を切って、手動で操縦する必要がある。

## 海や池で2人死亡

### 広島と新潟

2日午前11時35分ごろ、広島県坂町の海水浴場で「少年が海に落ち、沈んだ」と管理事務所の職員から119番があった。海水浴客の1人が約23メートル沖合の水深約2メートルの海底で少年を発見、少年は病院に搬送されたが、間もなく死亡した。

県警海田署などによると、広島市南区本浦町、高校1年松本久志君(16)で水死とみられる。松本君は高校の友人2人と海水浴に来ていた。

同日午後5時10分ごろ、新潟県新発田市本田の池に、近くの市立小6年渡辺瑞菜さん(11)が転落した。水深約5メートルの底から約1時間半後に引き上げられ、病院に運ばれたが、間もなく死亡が確認された。

新発田署によると、渡辺さんは同日午後4時50分ごろから、同級生の女児2人と池の周辺で遊んでいた。池の縁に座っているうちに滑って転落したらしい。一帯は立ち入り禁止になっておらず、転落した場所に柵はなかった。

## ニュースファイル

◆駐車場で開錠用具隠し持った疑いで逮捕　盛岡東署は1日、ピッキング防止法違反の疑いで、いずれも自称で盛岡市本町通2丁目11の31、無職岩舘清容疑者(50)を現行犯逮捕した。

逮捕容疑は同日午後11時20分ごろ、同市本町通の駐車場で、正当な理由なくマイナスドライバー1本をバッグの中に隠し持っていた疑い。

◆一戸で作業小屋など全半焼　2日午前3時25分ごろ、一戸町出ル町字泉沢58、農業泉久保登志夫さん(62)の作業小屋付近から出火。木造2階建ての同小屋、隣接する作業小屋2棟計171平方メートルを全焼し、泉久保さんの空き家約81平方メートルを半焼した。泉久保さんがやけどを負った。原因調査中。（二戸署調べ）

◆二戸市で空き家全焼　2日午後1時50分ごろ、二戸市下斗米字坂本7の空き家＝青森県三戸町川守田、自営業戸舘将高さん(73)所有＝から出火。木造平屋の同空き家約120平方メートルを全焼した。出火当時、戸舘さんがごみ焼きをしていたという。原因調査中。（二戸署調べ）

◆県職員が一時不明　1日午後9時45分ごろ、宮古市刈屋の山林に入った同市西ケ丘3丁目10の4の207、県沿岸広域振興局職員蛇沼貴典さん(31)、同市藤の川13の20、同振興局臨時職員佐々木吉男さん(56)と連絡が取れなくなったと、同振興局が宮古署に届け出た。

2人は2日午前5時15分ごろ「自力で下山した」と同署に連絡。約15分後、同市刈屋の刈屋小で署員が無事を確認した。

2人は県有林境界保全調査のため1日午前に入山し、暗くなったため夜が明けてから下山した。

# 「威迫と利益誘導、巧妙」

## 東京地裁 特捜部取り調べ指弾

### 陸山会事件 調書不採用

小沢一郎民主党元代表の資金管理団体「陸山会」の収支報告書虚偽記入事件で、政治資金規正法違反罪に問われた元秘書3人の供述調書を東京地裁が不採用とした詳細な理由が2日、共同通信入手の6月30日付の決定書で明らかになった。東京地検特捜部の取り調べを「威迫と利益誘導を織り交ぜながら巧妙に誘導した」と指弾している。

「特捜部は恐ろしいところだ。何でもできるところだぞ。捜査の拡大がどんどん進んでいく」。一連の調書の任意性判断で最も重視されたのは、衆院議員石川知裕被告(38)を逮捕前日に取り調べた検事の発言だった。

石川議員はこの後に自らの虚偽記入を初めて認めたが、決定は「強い心理的圧迫」を理由に調書の任意性を否定。小沢元代表との間の「説明・了解」についても「これぐらい書いても小沢さんは起訴にならないから」との説得で調書が作成されたとし、「硬軟両面からの言辞で調書に署名させた」と非難した。

なぜ密室での発言を認定できたのか。石川議員が起訴後に同じ取調官から受けた任意聴取をひそかに録音した記録が根拠になった。

「ここは恐ろしい組織なんだから、何するか分かんないんだぞって、諭してくれたことあったじゃないですか」と話す石川議員に「うんうん」と答える取調官。

決定は「検事を陥れたり、自分に有利な話を引き出そうと画策した可能性がある」と慎重に評価しつつも、録音がなければ任意性の争いは「水掛け論に終始していた可能性すらある」と、取り調べの録音・録画（可視化）を念頭に置いているかのような姿勢を見せた。

虚偽を告げて供述を引き出していたことも明らかになった。起訴直前の昨年2月2日。石川議員は大久保隆規被告(50)への報告をいったん否認したが、「大久保は報告されたと供述しているが」と尋ねられ、「はっきり覚えていないが、そう言うならそうだったかもしれない」と認めた。

一方、大久保元秘書は1月30日、大阪地検特捜部の証拠改ざん事件で実刑となった前田恒彦元検事から「石川が報告したと言っている」と聞かされ、否認を翻した。決定は「真実に反する事実を告げて自白させた。まさに切り違え尋問に当たる」と厳しく批判した。

石川議員への取り調べは、池田光智被告(33)の供述調書の判断にも波及。長時間の相当厳しい取り調べを行ったことは否定できないとし、有力な証拠はないが「『疑わしきは被告人の利益に』の原則を重視すべきだ」と述べ、任意性の立証責任は検察側にあるとした。

今回の決定で、検察は20日に行われる論告の大幅な見直しを迫られる。地検幹部は「客観事実の積み上げで立証できる。土台は崩れない」と有罪獲得に問題はないとの見方を示す一方、「東京地検特捜部で調書が採用されなかった事件はほとんどない。異議申し立てを検討中だ」と語った。

# クマに襲われ母子重傷

## 金ケ崎 実家帰省、川遊び中

2日午後0時45分ごろ、金ケ崎町永栄中の又のキッツ川で、花巻市北笹間13の16の2、パート従業員小原久美さん(28)と長男亜似ちゃん(3)がクマに襲われた。小原さん親子は頭や顔を爪で引っかかれ重傷を負った。

水沢署によると、親子は実家近くの河原で遊んでいたところを襲われ、久美さんが亜似ちゃんを抱きかかえて実家に帰宅。家族が119番通報した。

親子は県防災ヘリで北上市内の病院に収容されたが、けがが重く県高度救命救急センターに搬送された。

実家の家族によると、親子は同日午前に帰省。昼食を済ませて川に行き、間もなく襲われたらしい。亜似ちゃんは頭蓋骨を骨折したとみられ、久美さんも血だらけだったという。

救急隊員の話では、久美さんは「川遊びをしていたら突然襲われた。大きいクマではなかった」と説明したという。

現場は同町南西部の県道花巻衣川線沿いの山あい。同署や町、地元消防団は広報車で注意を呼び掛けた。

近所の女性は「以前にも付近で釣り客がクマに襲われた。また現れないかと思うと怖い」とおびえていた。

ライトアップされ、夜空に美しく浮かび上がるめがね橋と「絆」の文字＝2日午後7時40分、遠野市宮守町

# 復興の絆 輝く

## 遠野・めがね橋 ライトアップ

イルミネーションの光に被災地復興の願いを込めて。遠野市宮守町のめがね橋で2日、「絆」作戦（実行委主催）と題したライトアップが始まった。近くの広場には絆の文字のイルミネーションも設置され、国道283号を通るドライバーの心を癒やしている。

住民有志によるカントリーダンスの後、実行委の八重樫正昇会長らが点灯式を行った。真っ暗な夜空に青、緑、オレンジ色に染まったためがね橋が浮かび上がり、絆のイルミネーションが点滅した。

遠野物語発刊100周年の昨年、めがね橋は毎日ライトアップされていたが、震災により中断。被災地の復旧活動に励む人々に感謝を表すため、3日までの2日間復活させた。

広場のイルミネーションなどの照明は、釜石市大町の藤田政司さん(61)が担当。自宅が津波で壊され、照明器具も波をかぶったが、分解修理して使える機材を持参した。

藤田さんは「震災後の一番苦しい時を宮守の人々に助けてもらった。皆さんのために働くことができてうれしい」と住民たちとの絆を強調した。

3日のライトアップは午後7時から同9時まで。